

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第 38 集 (2006年度) 2007年 3月発行：189-206

現代日本における入試方法の多様化と 新しい学生募集戦略に関する一考察

加 澤 恒 雄

現代日本における入試方法の多様化と 新しい学生募集戦略に関する一考察

加 澤 恒 雄*

緒言

現代日本の大学は、今やさまざまな改革を断行中であるが、これまで入学選抜試験の方法についても、より適切な選抜の方法を模索してきた。とくに近年は、受験生人口が激減していることや、多様な能力を持った学生によるキャンパスの活性化を目指して、従来的一般入試における「学力」という尺度では測れない能力を持った学生が入学できるような入試方法の開発の必要性が強まってきた。いわゆる「入試地獄」や「受験戦争」などを招来した「偏差値学力による入試」一辺倒の時代は、もはや過去のものとなった。本稿では、全国の大学で試みられている入試方法の改善と、大学の生き残りを賭けた多彩な学生募集活動の現状ならびに今後の課題について考察し、論及してみたい。

I. 入試方法の多様化

現今の大学入学選抜の方法は、たいへん多彩であり、多様化している。たとえば、1) 一般入試：これはほとんどの場合、前期日程と後期日程で2回以上行われることが多い。2) 特別選抜入試としての推薦制度：これは、後で詳述するように、「公募制」と「指定校制」の2種類に大別される。3) 大学入試センター試験：平成元年度まで実施された「共通1次学力試験」に代わって、平成2年度から実施されている。それから第4の入試ルートとして、4) アドミッションズ・オフィス(AO)入試がある。これについては、後ほど改めて詳述する。

かつては一般入試方式が主流であったが、以上のように、さまざまな入試方式が次々に登場した背景としては、主として以下の3点を指摘することができよう¹⁾。まず第一に、高等学校における「振り分け進路指導方式」からの脱却が叫ばれたことである。それまでの入試では、「偏差値」学力の高い学生が有利なペーパーテスト方式の入試が行われていたが、大学は多様な学生を入学させる必要性から、偏差値一辺倒の入試からの脱却を求められることになったのである。高校における偏差値による振り分け進路指導の追放・是正²⁾が、日本の教育界で1つの大きな流れとして生起し、現在に至っているのである。

第二の背景・要因として挙げられるのは、日本の少子化傾向が恒常化しており、大学入試適齢者としての18歳の若者人口は、減少化の一途を辿っており³⁾、大学の学生募集は困難をきわめ、定員

* 広島工業大学工学部教授

割れによる経営困難な大学も続出している⁴⁾中で、さまざまな学生を入学許可することによって、少しでも多くの新入学生を確保することは、多くの大学にとって至上命令課題となっているのである。

そして第三に、大学教育の活性化に関わる要因として、さまざまな個性を持った学生を集めることによるキャンパスの活性化が重要視されるようになったことである。従来的一般入試による選抜では、学業成績の良好な学生ばかり入学を許可されたのであるが、若者の多彩な能力や個性を評価して入学を許可することによって、さまざまな個性や能力を持った学生をキャンパスに集めることが、学生の成長や教育効果を倍加するのに重要であろう、という認識が大学関係者の間に広まり、定着してきたのである。

II. 推薦入試方式の多様化

当初、一般入試方式の補足として導入された推薦入試方式には、1) 公募制、2) 指定校制、それから3) それらの2つを併用するやり方の3種類がある。また、応募の条件として、1) 第一志望者を対象とし、合格した場合、必ずその大学に入学するという前提で行われる「専願制」の推薦入試と、2) 他の大学を掛け持ちで受験することを認める「併願制」のそれがある。なお、前者は、2006年度現在、すべての国・公立大学で採用されているが、私立の場合は、地域差があり、かなり多様である。たとえば、北海道や東北あるいは関東地区のような東日本では、「専願制」の方式を実施している私立大学が多数を占めている。それに対して、中部や近畿あるいは中国・四国地区のような西日本の私立大学では、「併願制」の方式を採用しているところが圧倒的多数にのぼっている。

次に、推薦入試における推薦のための「成績基準」について述べると、個別の大学によって異なるが、たとえば、1) 全教科目の全体の「評定平均値」が3.0以上であること、2) 課外活動や社会活動（ボランティアとして）に積極的、主体的に取り組んだ者、つまり、学習意欲や人格面などの諸側面に関する条件や、3) さまざまな資格や免許等の取得能力の側面等々、複線化・多様化（多方面化）している。こうした成績基準を設けている大学が一般的であり、多数であるがしかし、最近、推薦の成績基準を撤廃している大学も増加しつつある。2005年度現在、「成績基準無し」の私立大学は、全私立大学のうち38.5%に達している⁵⁾。

また、一般入試に先行して実施される、この推薦入試の「定員枠」が推薦入試制度導入大学の増加によって大幅に拡大している。4年制私立大学の実に99.4%が実施しており、382の短期大学は、100%実施している。この短大の推薦入試による入学者数は、68.2%で、一般入試による入学者数の約2倍に達している。それではなぜ、このように推薦入試による入学者の比率が高まっているのだろうか。その背景要因やメリットについて考えてみよう。

まず第一に、長期化している不況によって、親がリストラされるなどに関わり、経済的側面からして、受験生が安全志向路線を選んだり、女子の進学率の増加などによって、浪人を回避しようとする現役入学志向が強まっていることである。そのため、予備校生（浪人生）の激減により、かなり有名な大手の予備校も閉鎖を余儀なくされている。

第二に、大学入試センター試験⁶⁾ 利用入試や一般入試よりも、推薦入試は早く行われるので、合格が早期に決まり、受験生にとって受験勉強や精神的な重圧から早く開放されることである。そして、受験活動に使う時間ならび費用を軽減することができるし、一番入学したい第一志望の大学合格を目指す受験生には、推薦入試はきわめてメリットが大きいと言えよう。さらにまた、大学側にとっても、入学定員の一定数を早期に確保することができれば、経営面での安定がはかられるというメリットがあり、受験生ならびに大学側の両者にとって、推薦入試方式は、魅力的なのである。

Ⅲ. 第4の入試方法—AO入試制度導入の背景とその課題

日本の高等教育が「ユニバーサル・アクセス」の時代に突入したことを象徴的に示すのが新しい選抜方式としてのアドミッションズ・オフィス (admissions office : AO) 型入試である。かつて受験者人口が増加の一途を辿り、浪人が増大していた頃は、学業一本槍の高偏差値学生が、大学入試に有利であった。しかしながら、近年は、キャンパスの活性化をもたらしてくれる個性派の学生を、積極的に合格させて入学させるためのAO入試方式を導入する大学が増えている。

Ⅲ-1. 日米のAO入試方式の相違点

まず最初に、AO (admissions office) 入試方式の先進国であるアメリカの場合と、日本のAO方式について比較して考察してみよう。なぜなら日本のAO入試制度の導入のきっかけは、「アメリカの事例をにモデルにして、日本独自のAO入試システムを構築し、日本型AO入試の整備をすること」という「中央教育審議会 (略称：中教審)」の答申⁷⁾ によって、もたらされたからである。

日米のAO入試方式には、大きく2つの相違点を指摘することができよう。第1に、アメリカのAO入試は、現行の日本のそれと比べて「丁寧な入試」ではない、ということである。一般的に言えば、アメリカの大学では、ほとんどの志願者について、高校の成績や、SAT⁸⁾ ならびにACTなどの全米共通テストのスコアで、機械的・自動的に合否を判定しているのである。すなわち、共通テストと高校の成績や活動記録が、設定された基準をクリアしていれば、自動的に入学が許可される仕組みとなっている。要するに、アメリカの大学の入学者選抜の基準とは、高校の調査書 (履修科目、各教科の評価、GPAならびに課外活動の記録、学校長または教員の推薦文等々が記録されている) と、SATやACTのような共通テストのスコアが、その2本柱であるということである。

第2に、アメリカのAO入試は、大学入学後のサービスないしケアの整備を前提としていることである。すなわち、大学入学後の適応のために、新入学生の“follow-up”システムの充実・整備と、AO入試システムがワンセットになっているのである。フォローアップ方式としては、1) リメディアル教育コースの充実、2) プロベーション (仮進級) 制度、あるいは3) 学生カウンセリング機能の充実などが挙げられる。

このようなわけで、アメリカの大学のほとんどでSATやACTのような全米規模の共通テストの結果が活用されており、こうした大学外部の専門のテスト団体で行うテストが、学力の「共通の基準」の役割を果たしているため、個別大学の所定の成績基準に照らして機械的な合否の判定が可能とな

るのである。

III-2. AO入試の目的と実施拡大傾向

日本のAO入試は、一般入試によるペーパーテストの成績では測ることができない多面的な能力を持った学生に対して、十分に時間をかけて「丁寧な入試」を行うことによって、積極的に入学を許可し、これからの時代に必要な個性豊かな人材を育成しようとするものである。すなわち、単に学業成績が優秀な学生だけでなく、学ぶ意識や意欲ないし熱意のある学生を求めているのである。そして、さまざまな個性あふれる若者がキャンパスに集まることによって、彼らの相互交流を通じて学び合い、刺激し合って大学教育の効果が倍加されることを、大学が志向し始めたのである。日本型AO入試を実施している短期大学は多数に上るが、ここでは、4年制大学に限って日本型のAO入試の実施を開始した年度を、過去10年に遡っていくつか列挙すると、以下の通りである⁹⁾。(括弧内は、学部名である。)

1990年度：慶応義塾大学（総合政策，環境情報）

1994年度：松山大学（経営）

1995年度：名古屋商科大学（商，外国語）

1996年度：鎌倉女子大学（家政）

1998年度：①愛知学院大学（情報社会政策），②同志社大学（神，文，商，工），③札幌国際大学（人文，社会）

1999年度：①桜美林大学（文，経済，国際，経営政策），②産能大学（経営情報），③立命館大学（法，経済，経営，産業社会，国際関係，政策科学，文，理工），他3校

2000年度：①東北大学，②筑波大学，③九州大学，④他のいくつかの国立大学

なお、2005年春の大学入試に関して、文部科学省によって行われた調査によれば¹⁰⁾、AO入試実施状況は、以下の通りである。1) 国立大学：25大学82学部に1467人合格、2) 公立大学：12大学18学部に226人合格、そして3) 私立大学：364大学31,373人合格となっている。また、この入試方式による入学志願者は、国・公・私立大学全部で、355万7,226人であった。2006年度にAO入試導入予定校の数は、2005年5月現在の調査で378校にのぼっている。なお、既にAO入試を実施している各大学の「募集人数枠」のさらなる拡大も増加している。

それではなぜAO入試は、このように拡大傾向にあるのだろうか。その背景要因について考えてみよう。確かに、「中教審」や「大学審（大学教育審議会）」の答申などを通じた行政による推奨・誘導がその大きなきっかけの1つになったのであるが、もう1つの大きな要因は、AO入試がこれまでの一般入試や推薦入試等の選抜とは異なり、選抜開始の時期や選抜方法等が、各大学の自由裁量に委ねられていることであろう。すなわち、それら選抜の時期等に関する制約は、次の通り緩やかに規定されているのである。平成17年5月26日付の文部科学省高等教育局長通知『平成18年度大学入学選抜実施要項』では、以下のように述べられている。

（前の部分は省略）

第3 選抜期日

1. 入学選抜期日は、次により適宜に定める。

(1) 入学選抜試験期日 平成18年2月1日から4月15日までの間。(以下省略)

2. アドミッション・オフィス入試、推薦入試に基づく選抜等において、学力検査を課さず選抜を行う場合は、上記の1の試験期日によることを要しない…(以下省略)

3. 推薦に基づく選抜による場合は、原則として、入学願書受付を平成17年11月1日以降とし…(以下省略)

この実施要項に依り、AO入試は、年間を通じて学生募集を行い、選考作業を行うことができるので、個別大学にとって学生の早期確保の観点からしても、選抜実施レベルにおける大きなメリットがあると言えよう。

III-3. AO入試方式の主要なパターン

それでは次にAO入試はどのように行われるのか概述してみよう。一般的に言えば、個別の大学・短大の「受け入れ方針」(アドミッションポリシー)に応じて、出願前にエントリーシート(これには志望理由や自己推薦文を記入する)で、出願の意志を表明し、入試事務局と事前に連絡を取ってから、正式に出願の手続きを行う。その際、調査書や小論文あるいはレポートなどを提出させる。大学側は、提出されたこれらの書類を丁寧に審査し、じっくりと日数と時間をかけて、面接や面談を実施し、書類審査に基づいて質疑応答を行い、場合によっては学生の相談を受けてアドバイスをしたり、プレゼンテーションなどを行うことによって、学生の学習意欲やコミュニケーション能力を審査して、選考作業を行う。なお、実際にはAOの実施方法やスケジュールは、各大学によってさまざまであることが1つの特徴でもある。

AO入試は、個別大学、学部あるいは学科単位でさまざまなやり方で実施されているのが、大きな特徴の1つである。そこで、現代日本の個別大学で実施されているAO入試の主要なやり方を、次の3つに分類¹⁾して述べてみよう。

1) その1: 体験型AO入試

これは、AO入試プログラムの内容として、大学の模擬講義やセミナーがあるので、それに出席・参加することが出願条件となっている。そして、聴講後にレポートの提出や課題報告を行わせる方式である。これを図式化すると、①模擬講座やセミナーにおける参加姿勢⇒②課題レポートの内容の吟味⇒③面接や質疑応答の結果を総合して⇒④合否を判定し⇒⑤合格発表、となるのである。

2) その2: 選抜型AO入試

この方式は、小論文やレポートを提出させたり、一定の長さの志望理由等を書かせたりして、それらの内容に関して面接・質疑応答を行う。このプロセスの中で志願者の入学意識や入学目的等を確かめて、合否を判定するやり方である。これを図式化すると、①1次審査の書類選考⇒②2次審査として、小論文や自己推薦書にもとづく面接⇒③合否判定⇒④合格発表という順序で行われる。

3) その3：対話型AO入試

これは、まず、志願者にエントリー手続きを行わせ、その後で、正式に出願書類を提出させる。それから面談や面接を複数回行って、入学後の学習相談を受けたり、大学のカリキュラムについての説明を行ったりする。このプロセスを通じて、志願者の人物評価や、入学意欲あるいは志願動機等を重視して、可否の判定や入学の許可を行うやり方である。これを図式化すると、①面接や面談⇒②プレゼンテーションや討論⇒③意欲やコミュニケーション能力の評価・審査⇒④可否の判定⇒⑤合格発表、という順序で行われる。

Ⅲ-4. AO入試のさまざまなメリット

アメリカ初め海外の多くの国々のAO入試とは異なり、日本型のAO入試は、志願者全員を対象とするのではなく、入学定員の一部を対象として行われている。これが理想的な入試制度であるとして、今後の普及が期待されているのは、以下のようなメリットがあると考えられているからである。まず、学生側にとってのメリット¹²⁾としては、1)「その大学で学びたい」という志望校決定を早期に行えること、2) 伝統的な一般入試における学力選抜では可能性が低かったような大学に入学を許可されたり、自分の能力や適性・関心に合った大学を選択することができること、3)「面接」を重視し十分に時間をかける、丁寧な入試であり、学生が自らの自主性と積極性をアピールすることができること、等々である。

また、大学側にとっても、次のようなメリットが挙げられる。1) 個性的な学生を入学許可することによって、キャンパスを活性化させることができること。2) 学生が、是非この大学に入って学びたいという強い希望を持って入って来るので、大学への帰属意識や愛校心が強く、卒業後も強い母校愛を抱いてくれること。3) 大学と学生のミスマッチを予防することができるので、中途退学者を少なくすることができること。つまり、「こんな学生に入学してほしい」という大学側の希望と「是非この大学で学びたい」という学生側の熱意が合致し、両者が納得して入学できる制度は、たいへん理想的なのである。さらに、4) 入試も教育の一環であり、入学後の学生に対する相談に応ずることも可能であること。要するに、AO入試は「総合評価方式」であるので、学生にとっても大学にとっても理想的なきめ細かい選抜方式である、と言えよう。それゆえ、今後ともAO型入試のよりいっそうの拡張や整備が必要となるであろう。

Ⅲ-5. 個別大学における具体的なAO入試の実施例

以下において、特色のあるAO入試を実施している全国の大学の中から、国・公・私立大学の順序で、いくつか取り上げて言及してみよう。

その1. 「愛媛大学のスーパーサイエンス特別コース」におけるAO入試¹³⁾

ここでは、特色ある選抜型AO入試が実施されている。この特別コースは、国際的な研究者の養成を行うために、学士課程から大学院博士課程までの一貫教育体制のシステムとして効果を上げており、全国的に著名である。ここでは、以下のような順序でAO入試が行われている。

- ①事前説明会の開催：これは、任意参加で行われるが、当日の参加ができなかった場合は、後日、相談が可能である。これは、スーパーサイエンス特別コースの概要説明会であり、各研究センターの巡回見学や関係教員との懇談などが行われる。
- ②出願期間：7月下旬の5～6日間。出願書類の提出は郵送に限られ、当日の消印は有効である。出願書類として、1) 入学志願書 2) 志望理由書 3) 志願者評価書 4) 調査書が必要である。
- ③第1次選抜：これは書類選考で行われ、出願書類を点検・審査して、募集人数の約2倍くらいまで絞り込む。
- ④第1次選抜合格者発表：おおむね9月下旬頃に行われる。
- ⑤第2次選抜：10月の第1週目の(土)、(日)の2日間に、次の内容で実施される。1) レポート：大学の講義を受講させ、その内容についてレポートを提出させる。2) 実験：大学が設定した各種のテーマから受験生が選択した実験を実施し、その結果の概要について、発表ならびに討論を行わせる。3) 最後に面接を行い、4) 合否の判定を行う。
- ⑥合格者発表：10月末頃に行われる。
- ⑦入学前教育：11月から入学するまでの5カ月間にわたって、「入学前予備教育プログラム」に従い、インターネットを利用して、指定図書の読後レポートなどを提出させる。

その2. 「筑波大学」の“AC”入試¹⁴⁾

同大学は、国立大学の中で最初にAO入試を導入した3つの大学の1つで、平成12年度(2000年度)から、“AC”入試の名称で実施している。その概要と特徴について、以下に紹介しよう。“AC”入試とは、同大学に平成12年度に設置された“Admission Center (AC)”が行うもので、一般にAO入試と呼ばれる方式の同大独自の別称である。同大学によれば、「“AC”入試とは、一般入試(前期・後期試験)、推薦入試とは別に、異なった評価尺度を用いる第3の入試制度である。」この“AC”入試の目的は、「知識量を重視する入試を改め、創造的な思考能力・意欲・行動力・適応能力などを多面的に評価する」ことである。同大学では、「大学の教育目標を十分に理解し、大学での勉学について明確な目的意識を持っており、その目的を達成するために必要な学力と気力を備え、自主性と積極性のある者を選抜したい」と明言している。

“AC”入試の特色として、同大学は自ら次の3つを挙げ、次世紀を担いうる優れた人材が多様な評価基準から生まれることを期待している。すなわち、1) オープン入試：高校卒はもちろん、既卒者、高校を卒業してから何年か社会で活躍した人を対象とし、広く社会全体に開かれた大学入試を、第1期(10月および11月)と第2期(翌年の5月)の2回行う。2) プロポーザル入試：自分のできること、したいこと、活かしたいと思う自分の素質・才能をアピールして、大学でやってみたいことを企画提案してもらい、自分の能力を示すことができるとと思われる資料を自由に提示させて、合否を判定する入試である。3) オンリーワン入試：志願者1人だけの個別入試を、その志願者にふさわしい、その人だけの基準で行うものであり、一律の基準でナンバーワンを決めるのではなく、キラッと光るオンリーワンの人を合格させる入試である。同大学のAO入試は、従来の「学

力競争型の選抜」や「学校推薦型の選抜」に対して、大学での勉学について、明確な目的意識を持っており、その目的を達成するために必要な学力と気力を備え、自主性と積極性を提示する「自己推薦型の選抜」であり、大学がそれを総合的に評価する入学者選抜制度なのである。

その3. 「広島大学」のAO入試¹⁵⁾

広島大学は、平成18年度入学者選抜を、「一般選抜」と「広島大学AO選抜」の2種類で行う。後者は、これまで実施してきた推薦入試、AO入試、特別選抜入試ならびにフェニックス入試を1つにまとめたものである。そして、この方式には、①総合評価方式、②対象別評価方式、それから③フェニックス方式の3つが含まれている。この方式は、学部、学科等それぞれの募集単位が“admission policy”（求める学生像）に従って、行われるものである。この「広島大学AO選抜」方式による募集学部・学科等は、次の6学部である。すなわち、①総合科学部総合学科、②文学部人文学科、③教育学部第二類～第五類、④法学部法学科ならびに経済学部経済学科の夜間主コース、それから⑤生物生産学部生物生産学科である。

次に、3つのAO入試方式の概要について、それぞれ説明しておきたい。

1) 総合評価方式によるAO入試：①小論文や面接、出願書類、プレゼンテーションなどを組み合わせ、各学部・各学科等の「求める学生像」に従って、きめ細かな選抜を行うものである。②志願者が大学入試までに培ってきた学力や、課外活動や、社会的な活動などを、結果だけでなくそのプロセスをも評価する。③志願者1人ひとりが持っている将来の夢や、ぜひ広島大学で学び、研究してみたいという強い意欲を重視し評価する。④彼の将来の夢をかなえるために、そして、大学での勉強を継続するために必要な基礎的な学力の判定を行う。⑤自分の意見を他の人に分かりやすく伝えたり、他人の意見を理解し行動したりするなどを、面接やプレゼンテーションなどを通じて評価する。この方式には、次の3つのパターンが含まれる。すなわち、①I型：大学入試センター試験を課さない選抜、②II型：大学入試センター試験を課す選抜、それから③III型：ゼミナール授業への出席を課す選抜である。

2) AO入試選抜対象別評価方式：この方式で「求める学生像」すなわち、アドミッション・ポリシーは、具体的には、①将来、いろいろな職業分野で活躍できる広い教養を持った専門人をめざす学生、②国際社会で活躍できるような広い視野を持った学生、とくに、海外生活を既に経験し、その体験を活かして、国際社会に貢献したいと思っている学生、である。

3) AO選抜フェニックス方式：これは、高齢者層の人々が、生涯学習型高等教育を受けるための入試制度である。この制度の前身は、平成13年度から導入された「フェニックス制度」であり、毎年10名前後の入学者が、若年層の一般学生とともに勉学に励んでいる実績がある。広島大学は、この入試制度の導入によって、全国有数の総合大学として、現代日本の生涯学習社会への要望に本格的に応えることを前面に打ち出しているのである。

その4. 「岩手県立大学」のAO入試¹⁶⁾

同大学では早期にAO入試を本格的に導入し、年々改善しながら充実したやり方でAO入試を実施しており、全国的に注目されている。すなわち、「大学入試センター試験」ならびに個別学力検査を一切課さないで、「面談Ⅱ」および提出された書類の審査によって、総合的かつ多面的に評価し、合否を判定するやり方で、AO入試を実施している。その際、必要に応じて大学のスタッフが高校等を訪問し、聴取を行うこともある。

「面談Ⅰ」は、「面談Ⅰ申込シート」に基づいて行う面談である。また、「面談Ⅱ」は、出願後に出願書類に基づいて行う面談である。そして、面談と書類の評価の観点としては、1) 能力およびこれまでのさまざまな活動について、高く評価できるものがあるか。2) 入学後に、何をどのように学びたいのかという明瞭な目標と強い意欲があり、その目標を実現するために十分な能力を有しているかが、とくに重視される。

「入試の流れ」を示すと、次のようになる。1. 「面談Ⅰ」の申込み(7月中旬): 「面談Ⅰの申込みシート」を提出させる。⇒2. 「面談Ⅰ」(8月初旬): 「面談Ⅰ申込シート」に基づいて行う。志望動機や志願者の能力ならびに活動に関して、高く自己評価できるものを述べさせ、大学で提供できる教育内容やカリキュラムの理解を深めさせ、出願するかどうかの参考にさせる。⇒3. 出願(8月下旬): 「自己推薦調書」、「志望理由書」、「志願者評価書」ならびに「調査書」などの出願書類を提出させる。⇒4. 「面談Ⅱ」(9月中旬～下旬): これらの出願書類に基づいて面談を行い、出願者の目標を、大学で実現できるかどうかについて、じっくりと話し合う。⇒5. 合否決定ならびに合格者の発表: 「面談Ⅱ」ならびに出願書類を総合的かつ多面的に評価し、合格者を決定して合格者の発表を行う。

その5. 「同志社大学」のAO入試¹⁷⁾

この大学が1998年度から導入・実施したAO入試についての「広報用パンフレット」には、この新しい入試制度について、次のようなキャッチフレーズが掲げられている。「個性をアピールする入試」、「すべてと向き合う入試」、「同志社大学でぜひ勉強したい人たち」と、「同志社大学でぜひ勉強してほしい人たち」をつなぐ方式。選抜の手順は、次の通りである。

①第1次審査: 書類選考

「自己紹介書」、「志望理由書」、エッセイ(自由テーマ)、自己アピールのための資料、調査書、推薦書等を提供させ、それらを十分な時間をかけて、詳細に審査する。

②第2次審査: 面接試験

第1次審査の合格者に対して行う。十分な時間をかけて面接し、あらゆる角度から真の能力を総合的に評価して合格者を決定する。なお、AO入試による学生募集は、神学部、文学部、商学部、各学部によって異なり、3～25名程度となっている。

「広報用パンフレット」で強調していることは、1) AO入試は、学力のみを重視する伝統的な

選抜方式ではなく、同大学で学びたいという意志を持ち、かつ多様な能力を秘めている学生を全国各地から掘り起こす能動的な選抜方式であること、2) 独自の個性や能力を持つ学生を、積極的に受け入れ、同大学の教育研究活動のさまざまな場での活性化を図りたいこと、3) AO入試は、いわゆる一芸一能入試とは大きく異なり、一芸でどんなに優れていても、総合的な評価の結果、AO入試では不合格となる場合もあること、すなわちAO入試は、知識の多寡のみを問うのではなくて、一人ひとりの能力や個性を適切に評価し、学習意欲や将来的な可能性までもを含めて、総合的に評価する選抜方式であること、それから4) AO入試は、大学教育を受けるに十分な基礎学力があり、受験資格を満たしていれば、自分の意志で出願できる「自薦型の公募入試」であること、等々である。

その6. 「広島工業大学」のAO入試¹⁸⁾

最後に筆者が勤務している広島工業大学の場合を取り上げる。広島工業大学のAO入試は、平成19年度入試(平成19年4月1日入学者)より導入されるが、これは、今後10年にわたって学士課程教育の充実に取り組む「教育改革18」計画の一環として、実施されるものである。平成18年度は、広島工業大学にとって学園創立50周年にあたっている。「教育は愛なり」という建学の精神に基づいて、教育の質的充実をめざし、今後ともよりいっそう社会の期待にこたえたいという目的で、「教育改革18」を策定した。広島工業大学では、既に多様な入試方法を導入・実施しており、一般選抜方式と特別選抜方式による7種類の入試方式を採用している。これらに加えて、一般選抜入試の1つとして、AO入試が新たに導入された。その主な特徴を以下に列挙してみよう。

- ①学力試験では判定できない能力を評価し、やる気・熱意を最重視し、「課題参加型」AO入試であること。
- ②3学部12学科ごとに、それぞれ選考方法が異なること。
- ③各学科が用意した「プログラム」(ミニ講義の受講、実験、レポート作成、模型製作、プレゼンテーション、など)と、十分に時間をかけて面談を丁寧に行うこと。
- ④一次選考は併願制であるが、その合格者が出願できる二次選考は専願制で面接を行い、2段階選抜方式であること。
- ⑤AO入試についての事前相談を、特定期間のみでなく、年間を通じて随時行うこと。

なお、本年度のAO入試は1回目なので、人数は募集総定員の5%と少ないが、今回の成果次第で、次年度以降は増員する予定であることを付言しておきたい。

IV. 学生募集活動の現状と課題

さて、ここまで入試方法の改善による入試方法の多様化について述べてきたが、次に、私学事業団が2003年7月に行った『学校法人の経営改善方策に関するアンケート』調査¹⁹⁾の結果報告書を手

がかりにして、大学経営の根幹に関わる多彩な「学生募集活動」(リクルートメンツ：recruitments)について、その動向を探って見よう。この私学事業団による調査は、私立の4年制大学ならびに短期大学を対象にして、毎年実施されているもので、調査項目は、A)財務に関する意識 B)経営組織等 C)人事管理 D)経理・財務 E)教育 F)学生募集 G)その他となっており、今回の報告書にはサブタイトルとして「教育・経営改革：模索から実践へ」が付けられている。ここではE)の学生募集の項目を参照することにしよう。「どのような学生募集活動を行ったか」という問いへの回答は、(1)新聞・雑誌の連合広告、(2)テレビ・ラジオ放送による広報・広告、(3)ホームページの開設、(4)広告代理店の主催する進学説明会や(5)学校案内書(要覧)の刷新(6)ダイレクトメールの送付(7)自校で実施する高等学校進路担当者対象進学相談(8)看板(駅看板、路上看板、大型スクリーン)(9)車内(駅ポスター、車内中吊、音声による案内)(10)テレビ放送による広報・広告など、31種類もの活動にわたっている。この多彩な学生募集活動の中で、「とくに効果のあったものは何か」という問いに対する回答結果から、上位5つを以下に挙げると、(1)自校での見学会、体験入学(オープンキャンパス)→71.1%(2)受験雑誌による広報・広告→51.8%(3)高等学校への訪問→43.6%(4)ホームページの開設→42.1%(5)広告代理店の主催する進路説明会→29.2%となっている。そして、従来の募集活動と比較して言えば、全般的に受験生(志願者)に対して親切な行き届いた仕方で行われていることが指摘されよう。募集活動の中心は、「不特定多数を相手にした広報・広告」から、オープンキャンパスや特定の高校訪問を中心としたきめ細かい「志願者への個別対応」の時代へと変化しつつあることが看取されよう。このことは先述したように、大学と学生のミスマッチを予防し、中途退学者をできるだけ少なくするという観点から、今後も重視されるだろう。いずれにしても、現代日本の大学は、学生募集において「氷河期時代」に突入しており、今後ともそうした状況が長く続くことは確実であり、私立大学は、自らの存続を賭けて、創意工夫をして活発な学生募集活動を展開しなければならないだろう。

結語

以上において、現代日本における多様な入試方法とその背景要因、ならびに多様な学生募集の方法について概述した。今や大学全入時代に突入しつつあり、「受験戦争」や「入試地獄」の時代は、過去のものとなったが、それに代わって、大学教育の現場では、新たな問題が生起している。

それは、多様な入試方法の導入や入試の易化によってもたらされた基礎学力の低い学生の増加の問題²⁰⁾である。つまり、従来のやり方では、大学の教育は成り立たず、成果を挙げることが困難になってきたことである。それゆえ、今や大学教育の方法の改善が、焦眉の課題となっている。この問題については、稿を改めて詳論しなければならない。

【注】

1) 荒井克弘(2003)「入試政策から学力政策への転換」荒井克弘編『高校と大学の接続—選抜接

- 続から教育接続へ』東北大学大学院・教育学研究科, 62-87頁。
- 2) 偏差値至上主義を批判して, 大学人が新しい価値の提案を行った文献として, 衛藤藩吉 (1989) 『くたばれ偏差値—個性値教育のすすめ—偏差値病につかれた親に捧げる本』ごま書房がある。衛藤藩吉氏は, 亜細亜大学の当時の学長であった。
 - 3) 18歳の若者人口の減少を, 具体的に言うと, 1991年に207万人であったが, 2000年には155万人と約4分の3に減少し, 2009年には120万人にまで減る見通しである。
 - 4) 2005年4月に大学に入学した学生数が, 定員割れを起こした4年制私立大学は, 過去最多で, 昨年より5校増えて160校に上り, 短期大学は158校で, それぞれ29.5%と41.3%に増加した。なお, 新入学生が定員の5割に満たない学校は, 大学が17校で, 短大は16校であった。また, 学生定員の充足率が14%と極端に低い大学もあり, 今後の存続が危ぶまれていることも調査で判明した (日本私立学校振興・共済事業団2005.7『平成17年度私立大学・短期大学等入学志願動向』)。
 - 5) 2005年度の公募推薦の成績基準は, 評定平均値が2.7~2.9:15%, 3.0~3.4:30.7%, 3.5~3.9:24.5%, 4.0以上:4.8%で, 「成績基準なし」は, 本文で述べたように38.5%と, 私立大学全体の約4割を占めている (cf. 「中国新聞」2005年10月9日, 朝刊, 第25面)。大学教育の付加価値を重視する声が強まる中で, 偏差値や評価などの成績基準を設けないで, 入学した個々の学生に対して, 卒業するまでの4年間にどのような学習をさせ, どのような能力を身に付けさせたかが, その大学の「教育力」として社会から評価され, 学生の満足度を高めることにもなる。それゆえ, 従来のように, 選抜入試で単に成績の良し悪しを問うよりも, 入学後の個々の学生の意欲, やる気あるいは目標等, 動機の強度を重視する大学が増えているのも時代の流れであろう。
 - 6) 因みに大学入試センター試験は, 毎年1月の中旬~下旬頃に, また, 一般入試実施の解禁日は, 例年2月1日以降である。
 - 7) 中教審の第2次答申 (1997.6) 『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』の「入学者選抜の改善」に関する章では, 具体的な提言の1つとして, 日本型AO入試の在り方の検討と整備について言及されている。
 - 8) アメリカには, 全米規模の共通テストとして, ①SAT: Scholastic Assessment Testing Programと, ②ACT: American College Testing Programの2つがある。前者は, ETS: Educational Testing Service (教育テストサービス) が実施主体で, 年間約110万人以上の高校生が受験している。現在のSATは, 1994年3月に改良され, SAT I (Reasoning Test) とSAT II (Subject Tests: これはアチーブメントテストである) から構成されている。②は, ACTが実施主体で, 年間約150万人以上の高校生が受験している。なお, SATは東部の私立大学の志願者を中心として, また, ACTは, 中西部を中心とする州立大学の志願者を, その主たる顧客として開始された共通のテストである。
 - 9) cf. 中村和己 (1999) 「日本型アドミッション・オフィス (AO) の現状と可能性」高等教育情報センター編『AO型入試選考の運営と実際』, 高等教育シリーズ第19集, 地域科学研究会, 23頁。

- 10) cf. 「データ：AO入試が拡大」：『毎日教育メール』（Education Mail：edu@mbx.mainichi.co.jp），2005年10月19日。
- 11) cf. 河合塾編『オープンキャンパス&AO入試ガイドブック 2004』2004.8，37頁。
- 12) AO入試のメリットやデメリットについての論考としては，次の文献を参照されたい。
 - ①藤井佐知子（2003）「新アドミッションシステム導入の背景と動向」荒井克弘編の前掲書，88-103頁。
 - ②小野博（1999）「ユニバーサル期の高校の大学の教育接続—大学入試の構造転換とAO型入試—」高等教育情報センター編『AO型入学選考の運営と実際』地域科学研究会，32-45頁。
- 13) cf. 河合塾編（2004）の前掲書，38頁。
- 14) 名取亮（1999）「転換期を迎えた“国公立型”大学入試コンセプト—フロントランナー・筑波大学におけるAO入試に向けて—」高等教育情報センター編『AO型入学選考の運営と実際』地域科学研究会，48-77頁。
- 15) 広島大学は，10学部11大学院に総数15,700人以上の学生を擁する，全国有数の総合大学であり，したがって，その学生選抜入試方法も多彩である。ここでは，平成18年度の次の資料を参照して説明した。
 - ① 広島大学『入学志願者用 大学案内—広島大学で何が学べるか』
 - ② 『広島大学AO選抜学生募集要項—総合評価方式』
 - ③ 『広島大学AO選抜学生募集要項—対象別評価方式』
 - ④ 『広島大学AO選抜学生募集要項—フェニックス方式』（①～④すべて広島大学入試センター編集・企画，2005.6.20，広島大学発行）さらに，次の資料も参照した。
 - ⑤ 『かけはし』広島大学アドミッションセンター年報（創刊号～第4号）。
- 16) この叙述は，『平成18年度 岩手県立大学アドミッション・オフィス入試概要』（岩手県立大学入試課発行）を参照してまとめた。
- 17) 二村重博「同志社大AO方式導入のプロセスと実際—“丁寧な”書類選考と面接」高等教育情報センター編，前掲書，142-157頁を参照した。
- 18) 広島工業大学のAO入試の詳細は，同大学のホームページ（<http://hirokou dai.jp/>）を参照されたい。
- 19) 日本私立大学振興・共済事業団：私学経営相談センター編（2005.3）『「学校法人の経営の改善方策に関するアンケート」報告—教育・経営改革：模索から実践へ—』私立インフォメーション。これは，毎年1回，7月頃に行われるアンケート調査に基づいて作成された詳細な報告書で，360頁余にもわたるが，その内容の要点の1部は，必ず新聞やTVなどで報道されている。
- 20) 現代日本における学力低下の問題については，さまざまな論争がなされているが，とくに大学生の学力低下の問題を取り上げた文献として，いくつか挙げると，
 - ①岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄編（1999）『分数ができない大学生』東洋経済新報社。
 - ②和田秀樹（1999）『学力崩壊』PHP研究所。
 - ③岡部・戸瀬・西村編（2001）『算数ができない大学生—理工系学生も学力崩壊—』東洋経済

新報社。

- ④戸瀬信之・西村和雄著（2001）『大学生の学力を診断する』岩波新書，岩波書店。
- ⑤市川伸一（2002）『学力低下論争』ちくま新書，筑摩書房。

Considering the Diversification of Entrance Examination Methods and Student Recruitment Strategies

Tsuneo KAZAWA*

Over the recent years, the methods of admission into universities and colleges in Japan have diversified and can be classified as follows. (1) general entrance examinations: these are mainly implemented through paper-based tests and have been conducted in most universities and colleges thus far; (2) special entrance examinations: these include examinations conducted for candidates that are recommended by senior high school principals and a preferential treatment system employed by certain universities; (3) tests conducted by the National Entrance Examination Center instead of the Joint Achievement Test; and (4) selection by referring to entrance examinations conducted by admissions offices, and other such offices and departments.

At one time, general entrance examinations were the most popular method of admissions; however, a variety of other admission systems for universities and colleges has sequentially emerged in the recent years.

I would like to indicate the following three backgrounds concerning the implementation of the extremely diverse admission systems for universities and colleges.

First and foremost, the aim should be to expel and correct the educational system that lays unnecessary emphasis on the students' school records, or in other words, a system that gives importance to deviation value.

Second, I would like to point out the difficulties faced in student recruitment as a result of the decrease in the population of eighteen-year-olds, who constitute a majority of applicants for entrance examinations, in Japan.

Third, in Japan, there is a growing need for a variety of students that have been admitted into universities and colleges through various admission methods. This is because of the vitalization of universities and colleges on campuses by various students. In other words, students with varying individualities and personalities will vitalize their university campuses, resulting in a better educational environment for many students.

In this paper, among the various admission methods mentioned above, I would like to particularly focus on the fourth method—the admissions office (AO) entrance examinations. This method is the most refined and exceptional method of admission because it allots sufficient deliberation time for selections and permits registrations for the entrance examination.

In Japan, the AO entrance examination system was introduced for the first time in Keio-Gijuku University in 1990. Since, the AO entrance examination system has been serially introduced in many universities and colleges. Moreover, henceforth, this system will be increasingly adopted by other universities and colleges.

What are the merits or advantages of the AO entrance examination system? First and foremost, universities

* Professor, Faculty of Engineering, Hiroshima Institute of Technology

and colleges will be able to get and retain a variety of unique students through these examinations. Second, the institutions will be able to recruit many applicants without the restriction of recruitment terms according to these examinations, and therefore, they will be able to get and retain the required number of students.

In sum, in this paper, I have considered and argued improvement of the various admissions methods for universities and colleges. In addition, I have discussed the conditions and certain problems of the student recruitment strategies in Japanese universities and colleges.